

高架橋下の乗り継ぎ空間のデザイン

1160144 藤原 梨紗

高知工科大学 システム工学群

建築・都市デザイン専攻

指導教員：重山 陽一郎

1. 計画の背景

とさでん交通株式会社は、路面電車・路線バス・高速バス・貸切バスを運営している。土佐電鉄・高知県交通の合併により、2014年10月1日に設立された。現状は、合併翌年から電車・バスともに赤字であり、また、利用者が減少している。2017年には黒字化が義務付けられている状況である。今後の事業をいかに合理的に行っていくかが、重要となる。

2. 現況の問題点

現在、バスの運転手不足が深刻化しており、バスを減らさなければならない。現在の路面電車と路線バスの走行を見直すと、高知駅前～御免町、潮見台、望海ヶ丘西・十津団地の各方面の経路は、はりまや橋と県立美術館通の区間で、並走している。これは非常に不合理である。(図-1)

3. 整備方針

県立美術館通でバスと電車の乗り継ぎを行うことで、合理化が可能になる。県立美術館通とはりまや橋の間は、路線バスを無くし、路面電車のみ走行するよう提案する。

ただし、乗り継ぎは面倒であり、好んで利用する人は少ない。そのため、乗り継ぎを行ってもらう上で、居心地のいい空間を提供することは、死活問題である。

本設計では、高架下に位置する県立美術館通の路面電車と路線バスの乗り継ぎ場所を、居心地のいい空間へとデザインした。

- 居心地のいい空間を作り出すために、
 - 暑さや寒さ、強風を凌ぐためのシェルターの設置
 - 買い物のサービス施設を設ける
 - 高架下の空間を美しくする

これらを踏まえ、設計を進めた。また、駐輪場の整備として、ライドアンドサイクルシステムを導入した。



図-2

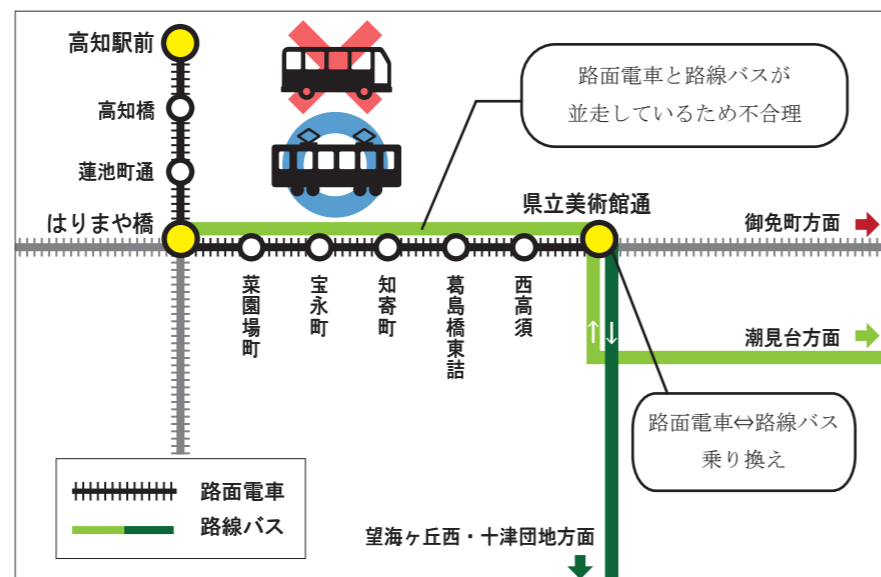


図-1 路線図



図-3 配置図

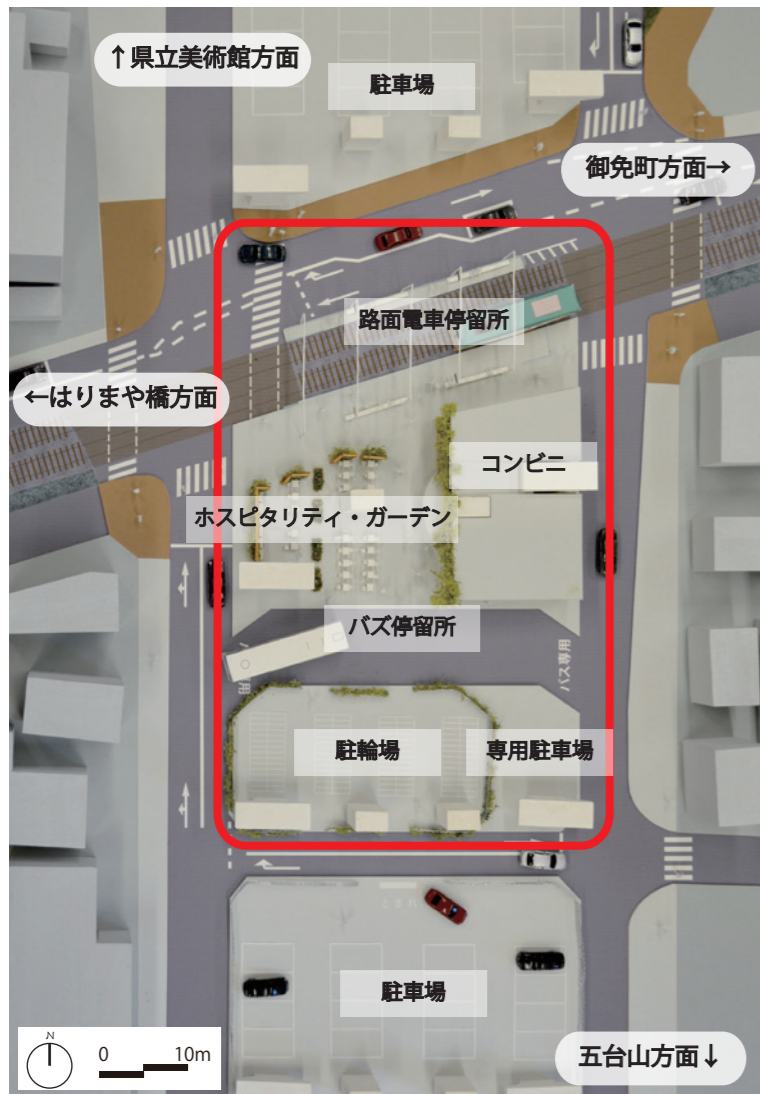


図-4 平面模型



図-5 現況写真

現在の県立美術館通停留所の敷地写真。電車とバスの停留所が隣接しており、周囲に時間をつぶせるような施設は無い。この空間で電車、バスを待つことになる。



図-6



図-7



図-8



図-9



図-10

4. デザイン

県立美術館通の停留所周辺の空間をデザインした。

路面電車停留所 (図-6)

現路面電車の線路はそのままに、停留所のみをデザインとした。新設高架橋が屋根の役割となるため既存の屋根は取り除き、架線用鉄柱をデザインした。鉄柱に沿い、長椅子を設置し、サイン等の掲示板は、鉄柱と一体化することで、全体的にシンプルなデザインとした。

新設高架橋 (図-7)

将来建設される2本の新設高架橋は、ストラット付床板箱桁橋で、2つの高架橋間にトップライトをはめ込んだ。トップライトを通して自然光が落ちるようになり、暗い空間を和らぐようデザインした。

ホスピタリティ・ガーデン (図-8)

コンビニの西側に、椅子を48席分配置した。電車、バスの待ち時間に、食事や読書、携帯等時間を過ごす時に利用できる空間とした。また、屋外のため、高さ約2mの緑化棚を北側に設置することで、風除けの役割となるようにした。既存の高架橋と新設高架橋の間隔が開くため、その吹抜け下に生垣を設置し、高架橋の暗いイメージの緩和と同時に、悪天候の不快感の緩和を考えた。

コンビニ

県立美術館通は約1時間に1本程度の電車、バスしか通っていないため、乗り継ぎするにあたって、数十分の待ち時間が発生する。電車やバスの待ち時間を過ごす事のできる施設として、コンビニを提案した。

・外観 (図-9)

新設高架橋の橋脚をコンビニ内に取り込み、コンビニの柱を新設高架橋のストラットに沿わせ、緑化することで、コンビニと高架橋の一体化を図った。また、暗い空間を緩和するため、コンビニ内の光を利用できるように、主にガラス面と木格子で仕上げた。

・内装 (図-10)

美術館を連想させることをコンセプトに、壁や床は主に白色で仕上げ、コンビニ内に取り込んだ橋脚には、県立美術館に関連した広告やTVを設置することで、美術館との関連性を深めた。コンビニ商品以外に、飲食を注文でき、イートインコーナーを設けることで、食事以外に勉強や読書、近所やママ友といった集まり場にも利用できるようにした。この空間はガラスの柵で仕切ることによってプライベートを確保できるようにした。